全海運所属組合の横顔

連載　第６回

九州地方海運組合連合会

その 14　日南地区海運組合

【組合の概要】

事　務　局　〒 883-0062
宮崎県日南市油津 3-11-17
油津海友会館２階
電話　0987-23-6815　FAX　0987-22-2962
JR 日南線『油津』駅下車、車で５～６分
理　事　長　宮田真一郎　油津海運㈱代表取締役社長
事 務 局 員　山口　京子
事務局員数　女子１名
組 合 員 数　利用運送業者５社
所属船腹量　なし

宮田理事長（左）と事務局員の山口さん

事務局のある日南市油津

油津港と内航海運

木造船用材の出荷で繁栄

日南地区海運組合のある油津（あぶらつ）の地名は、「吾平津（あひらつ）」がなまったものともいい、神武天皇の妃である吾平津姫との関連を語られることが多い。吾平津姫は『古事記』で阿比良比売（あひらひめ）とされ、海彦を祖とする日向の隼人の有力者である阿多小椅（あたのおばし）の妹で、初代神武天皇が日向在住時に嫁し、『日本書紀』では男神の手研耳命（たぎしみのみこと）と岐須美美命（きすみみのみこと）を生んだとされている。ちなみに、２代天皇はその異母弟の綏靖（すいぜん）天皇（神渟名川耳命（かんぬなかわみみのみこと））である。

他説によれば油津は、荒波の無い穏やかな海面が「油のような」様子であることから、「油津」と呼ばれるようになったともされる。港の東方は屈伏のハナ（現在の大筒鼻）が海へ張り出し、天然の防波堤のような役割を持って入江のような地形を作り、油津を良港としている。屈伏のハナは本来、島であったものが古い時代に広渡川が陸地と紫がったものであるらしい。

日南市の中央に位置する飫肥（おび）地区は、天正 16 年（1588）から明治初期までの 280 年間、飫肥藩伊東氏５万１千石の城下町として栄えた。今でも残る武家屋敷を象徴する門構え、風情ある石垣や漆喰塀の町並みは、昭和 52 年（1977）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている飫肥の町並み

宮崎県の海岸には、地形の利によって天然の良港が点在し、平安の頃から大陸との交易の中継港として利用されてきたという。大陸の物資によって利益を得ようと、海賊行為に及ぶ者もあり、油津の港が「倭冠（わこう）」の拠点となった時代もあったとされる。

油津港

江戸時代に入ると、幕府が海外との交易を長崎で独占したため、交易中継港としての日向沿岸は、急激に寂れていったとされるが、油津港は飫肥藩の元で終息した南蛮貿易に代わって、需要が高まった飫肥杉の積出港で賑わった。貞享３年（1686）に飫肥藩が財政の中心として、飫肥杉による林業振興を進めるため、３年の歳月をかけて広渡川河口部と油津港とを繋ぐ開削を完了させると、切り出された木材の港への搬出の効率が飛躍的に向上、油津港から「千石船」に積まれて送り出される木造船用材の「弁甲材」は、藩財政に大きな富をもたらすことになった。

江戸末期には、油津港から送り出される物資の３割ほどが弁甲材であったという。油津港は、木材の積出港として活気を取り戻すことになったのだった。油津港の北に広がる日向灘は、当時の海上交通における難所であり、風見（天候調査）のための長期滞在者が多く、港町として賑わいと繁栄を見せた。歌川広重の名所絵『六十餘州名所圖會（ろくじゅうよしゅうめいしょずえ）』にも「日向油津ノ湊飫肥大島」として描かれている。

開削した堀川運河の開通によって油津は、港としての機能が急速に高まり、以来、商港・漁港として栄え、重要な港となっている。堀川運河は木材の搬出を容易にする目的で、広渡川と油津の港を繋いで開削され、天和３年（1683）に工事が始まり、貞享３年（1686）に完成した。その堀川を跨いで東西を繋ぐ石橋が明治36年（1903）完成の堀川橋である。堀川の東側、堀川橋の袂から少し南へ下ると細い路地が縦横に延びる一角がある。路地沿いには古い時代を彷彿とさせる家々が今も建ち並んでいる。狭い路地は、車社会になる以前からの町並みであることをうかがわせる。現在では「油津１丁目」、「油津２丁目」の街区だが、かつては「上町」、「中町」、「下町」と呼ばれて、繁華な町並みを形成していた。この町並みこそが、かつて繁栄を謳歌し、活気に満ち溢れていた油津の町そのものである。今では町の中心部を貫くように国道220号によって二分されているが、国道220号と堀川運河に囲まれた一角は今も往時の面影を色濃く残している。

堀川運河と堀川橋

明治時代になると油津港と周辺の町は、自由経済の繁栄を謳歌したとされる。鉄道が普及する以前の油津港は、関西以東への海路の基地ともなり、港周辺には乗船を待つ人々を受け入れる旅館が数多く建ち並んで賑わったという。弁甲材は造船用材に適していたことから、大きな需要を生んだものだった。昭和初期には阪神、関門、朝鮮方面への木材搬出が活発となるとともに、昭和13年（1938）には製紙工業が背後地で操業するようになり、戦後の昭和20年代には、飫肥杉の弁甲材の産出が最盛期を迎えた。しかし、造船技術の近代化に伴い鋼船化が進み、造船材としての木材需要が落ち込むと、当然のように飫肥杉の需要も激減したのだった。

油津港は、昭和27年（1952）に重要港湾の指定を受け、30年（1955）に港湾計画を策定後、防波堤や係留施設などの整備が進められ、現在でもなお、宮崎県南部の海の物流基地として役割を担い、大型船の着岸も可能な埠頭の工事を始めとした整備が進められ、少しずつ

その姿を変えつつある。

平成10年（1998）の東埠頭供用開始により、平成11年（1999）には、油津と東京～大阪を結ぶ川崎近海汽船の定期RORO航路、平成21年（2009）3月には油津と神戸とを結ぶ井本商運、OOCL（オリエント・オーバーシーズ・コンテナ・ライン・リミテッド／本社・香港）のコンテナフィーダー航路が開設され、県南地域と大都市圏、アジアとの海の玄関口として重要な役割を果たしている。

油津港は、歴史遺産である堀川運河と一体化した親水空間としての整備も重要なものと認識されている。平成15年（2003）1月には豪華客船『飛鳥』が初入港し、歓迎イベントなどが開催されて賑わった。また、平成27年（2015）には、6万㌧級クルーズ船が寄港可能となったことなどから、近年では多くのクルーズ船が寄港しており、県内のクルーズ受入拠点としての役割も果たしている。今後の油津港は、物流や漁業のみならず、レジャーや観光の拠点としても、宮崎県南部への海の玄関口としても、新たな役割を果たすものと期待されている。

【組合活動】

油津海友会館から発足

日南地区海運組合の地元貨物は、かつて地元産出の飫肥杉の海上輸送を中心として栄えてきたが、現在は王子製紙向けの原料・資材や砂利などがある程度。組合員は現在5社で、貸渡事業者も運送事業者も廃業し、すべて利用運送事業者である。

日南地区海運組合は油津海友会館2階

大正中期に地元船社や他地区船主が「油津海友会」を設立して土地や建物を購入。海運組合活動の土台を築いた。当時の会員は地元船主が20～25社、他地区船主が10～15社といわれ、月々に基金を積み立てて資金としていた全国でも珍しいケースだった。建物の油津海友会館は昭和30年(1955)に焼失し、翌31年(1956)に再建されている。現在の2階建ての油津海友会館は、浜の通りを挟んで油津港に面して建っており、1階が靴修理会社がテナントとして入居し、2階に日南地区海運組合の会議室と事務局がある。

日南地区海運組合事務局

地区組合の活動は船主の集まりである「油津海友会」を母体としてスタート。昭和32年（1957）4月に当時海友会の会長であった石井弥平氏（元油津海運社長）が日南地区海運組合の設立とともに理事長に就任した。現在は、宮田真一郎油津津海運社長がつとめている。宮田逸郎前理事長（前油津海運社長）の長男である。

日南地区海運組合は組合員が少なく所属船腹量もないので、油津海友会館のテナント料と組合員の基本会費だけでは運営出来ないため、油津港に入港するRORO船、コンテナ船を始めとする商船やプレジャボートなどの給水作業料も収入源にしている。以前は、市有地に船員の家族向けの貸家も所有していたが、火災で焼失してしまい、また組合員の融資、保険事務代行業務も組合員の減少によって停止している。

油津海友会館は、JR日南線油津駅から海へ向かって車で5～6分のところにあり、事務

局員は山口京子さんひとり。所帯が小さいので独自の活動は難しく、全海運、九海運の指示や連絡に基づいた業務、宮崎運輸支局などからの連絡業務と組合員への伝達が主体となっている。

【文化と伝承】

住吉神社と吾平津神社

日南地区海運組合ではかつて、油津港に船員の憩いの場として緑地帯を造成したこともある。また、海上安全を祈願し大阪の住吉大社から勧請して、住吉神社の祠を日南港に面した児童公園に建立している。また、ここには初代組合理事長の石井弥平氏の寿像を建立し、功績を讃えている。

住吉神社（左）と石井弥平氏像

油津地区の古くからの海上安全の守護神としては、堀川運河に架かる堀川橋の袂に吾平津神社（あひらつじんじゃ）がある。社伝によれば和銅２年（709）創建で、かつては乙姫大明神と称し、江戸時代、飫肥11神社の１社として歴代飫肥藩主の尊崇を受けていたと記されている。吾平津神社の祭神は、前出の吾平津昆売命。この地で、狭野尊（さののみこと）（神武天皇の幼名）の道中安全を祈ったという故事から、交通安全、航海安全、商売繁昌、諸祈願成就にご利益があるとされている。明治維新後に知藩事となった伊東裕帰（13代藩主伊東祐輔の長男）の意で、乙姫大明神から吾平津神社へと改称されており、乙姫稲荷大明神の祠は吾平津神社本殿の側に鎮座している。

吾平津神社本殿（左）、乙姫稲荷大明神（中）と海上安全の御守護札

【取材こぼれ話】

平成16年度後期（2004年9月27日～2005年3月26日放送）のNHK連続テレビ小説「わかば」は、日南市の飫肥の町が物語の舞台のひとつとなっていた。主人公若葉の伯父の家である「村上酒造」の玄関先が印象的に幾度も劇中に登場したが、その「村上酒造」の玄関先のロケ地は飫肥ではなく、この油津の一角であった。町中の路地をのんびりと歩けば、「わかば」のドラマで見覚えのある風景に出会うことが出来るだろう。

また、吾平津神社の鳥居の傍らに、山田洋次監督の松竹映画「男はつらいよロケ地」を示す案内板がある。堀川橋を中心とした一角は、その第45作「寅次郎の青春」（1992年）の舞台となったが、それを示す案内板である。堀川橋周辺には、明治期から昭和初期に建てられた建物も多く、その景観は古きよき時代を彷彿とさせて郷愁を誘う。堀川橋周辺の町並みの佇まいが作品世界のイメージに合致したのだろう。